

初^{はつ}午^う祭^{さい}

二月最初の午の日に、京都の伏見稻荷大社をはじめとし全国の稻荷神社で初午祭が斎行されます。

初午の日は、和銅四年（七一）二月のこの日に稻荷神が初めて三ヶ峰（稻荷山）に降臨されたことにちなむもので、このことが稻荷神社の総本社である伏見稻荷大社の鎮座の由来ともなっており、全国の稻荷神社では特に重要な日として祭事が行われております。

初午の行事は中世から稻荷信仰の普及とともに、庶民の間で全国的に広まりました。この時期は農事始めともなっているため、その年の五穀豊穰などが祈願されております。又、養蚕^{ようさん}地帯では繭玉をお供えし養蚕の祈願を行ったり、漁師の間では豊漁の祈願が行われるなど多くの人々に崇敬され、現在では商売繁盛・事業繁栄といった御利益などを願う参詣者で各地の神社が賑わいます。

『山城国^{ふとぎ}風土記逸文伊奈利社条』に初午にまつわる話が記述されております。

秦公伊呂具^{はたのみいろく}という富豪が、その富に奢って、餅を的として矢を射たところ、たちまち餅が白い鳥に化して飛び去ってしまいました。その鳥を追いかけたところ鳥は山の峰（稻荷山）に降り立ち、稲と化しました。この地には社が建てられ稲が成ったことにちなみ「イナリ」の社名がついたと言われています。その後、伊呂具の子孫は伊呂具の行いを悔いて、稻荷山の木を家に持ち帰りお祀りしました。これは現在、初午の時に伏見稻荷大社で頒布される「験^{しるし}の杉」の由来となっており、この杉は各家庭に稻荷神を招来するものとして信仰されています。

平安時代、初午の日に伏見稻荷大社へお詣りすることは一種の流行のようなものとなっていました。それは江戸時代の「おかげ参り（伊勢の神宮へのお詣り）」によく似ています。清少納言は有名な『枕草子』の中で初午に関して次のように述べています。「二月午の日の暁に、稻荷の社にお詣りしましたが、中ノ社の辺りでもう苦しくなってきました。何とか上ノ社まで登りたいのですが、もう十時頃になってしまい、暑くて涙をこぼしたいほどわびしい思いをしました。途中すれ違った四十余才の婦人が“私は今日七度参りをするつもりです。もう三回巡りましたけど、あと四回くらいは何でもありませんよ”と知人に話しているのを聞き、誠にうらやましく思ったものです」

時代を経て、稻荷神は仏教の茶吉尼^{たきにん}天と習合（合わさる）したことから、愛知県の豊川稻荷のように仏教界においても信仰されています。現在、全国における「稻荷神社」の数は本社で三、五〇五社、境内社が四、六五四社あり（神社本庁教学研究調べ）、広く全国的に分布しています。これに会社等でお祀りしている「稻荷社」や「祠」の数を足すと莫大な数になるでしょう。

時が経っても人々の稻荷神社への信仰は変わらず続いています。